

11月の末は感謝祭の月ですね。日本は11/23、つまり昨日が勤労感謝の日です。働けること、仕事が出ることの感謝ですね。アメリカでは11月の第4木曜、今年でしたら11/28が収穫感謝祭ですね。今から約400年前の1620年の11月に信仰の自由を求めてイギリスからやってきた清教徒と呼ばれるクリスチャン102名がアメリカ東海岸のプリマスという港に着きました。厳しい冬を超えた翌年には半数の人が生き残り、その年、収穫物が多く与えられたことから神様に感謝して教会で礼拝と食事会が持たれるようになったのが感謝祭の始まりです。今日礼拝に集まられたお一人お一人にとっても今年振り返ってみますと神様に感謝すべきことがいろいろとあったのではないのでしょうか。実は教会暦、教会のカレンダーで行きますと来週からアドベント（待降節）が始まりますがこれが一年の始まりです。つまり今日は教会暦でいくと年の最後の主日礼拝です。今日、ご一緒にみことばを学びながら神様に心からの感謝を捧げるとはどういうことなのかということを考えてと思います。

今日の箇所には10人の重い皮膚病（これをこの聖書ではツアラートと原文のまま書かれています）にかかった人が出てきます。この病気は単なる薬を飲んだり治療して治すという種類のものではありません。何より、個人的に病気の症状としての問題だけでなく宗教的に汚れたものとされていました。この人たちは、罪深く汚れた者であるから聖い神様に近づくことができない者とみなされていたのです。加えて、肉体的に様々な症状がありますから病人たちは社会から斥けられ、人里離れたところに追いやられ、人前に出るときには布で顔をおおい、「汚れた者です。汚れた者です」と唱えながら道を歩かなければなりません。つまり社会的にも切り離されていたのです。ただこの人たちも病気が治ったら、自分のからだを祭司に見せ、きよめの儀式を受ければ、社会に戻り、神殿で礼拝することが許されていました。主イエスは、さまざまな病気をいやされましたが、そこにはこのようなツアラートにかかった人たちも含まれていました。主は、人々が近づこうともしなかった病人に、自分から近づき、手を置いてその病気を治されました。主イエスはこの10人の人たちがいたサマリヤとガリラヤの境界線にある道を歩まれました。あとで分かることですがこの道は普通に誰でもが通る道ではありません。ユダヤ人はサマリヤ人と犬猿の仲でしたから少しでもサマリヤとかかわらなくても良い道を通ります。ハッキリ言ってこの道はまわり道でした。つまり、主イエスがガリラヤとサマリヤの境界にある道を歩まれたのは、ここにいる10人のツアラートの病人を癒すためであったということです。

さて主イエスと弟子たちが道を歩いているのを見た10人の病人たちは、声を張りあげて、「イエスさま、先生。どうぞあわれんでください」と叫びました。主イエスはそれに答えて、この人たちをいやしてあげるのですが、実際は、先ほども言いましたように、この人たちの叫びを聞く前から、その声なき叫びを知っておられ、主イエスのほうからこの人たちに近づくために、サマリヤとガリラヤの境界にある道を通られたのです。この人たちがサマリヤ人であろうが、ガリラヤの人であろうが、また、社会から隔離された人々であろうが、イエスはそうした隔てや区別を乗り越えて、この人たちに近づいてくださいました。考えてみれば創造者である神様と被造物である人間、きよく正しい神と罪を持った人間の間にはどれだけ大きな隔りがあるのでしょうか。それは誰も越えることのできない大きな隔り、格差です。そして人間の側からは決して越えることはできません。しかし神は、ご自分の御子を人として地上に生まれさせ、このお方を罪人の救い主とされることによって、この隔りを取り除いてくださいました。神のほうから、この隔りを越える手が差し伸べられたのです。これは神の愛から出たこと、私たちにとっての大きな恵みです。「キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。」エペソ2:14,15ですから、主イエスにあっては、この

世には誰ひとり神から遠い人はいないのです。神から無視されたり、離されている人はいないのです。もしそう感じているとすれば、実は私達の側のプライドや身勝手さで神様に背を向けているからです。主イエスは私たちのたましいの叫びを聞いて、私たちに近づき、私たちを救ってくださるのです。

10人の病人たちは、イエスが自分たちのほうに来られるのを見て、「イエスさま、どうぞあわれんでください」と叫びました。13節に「声を張り上げて」とありますから、それはもう必死になって叫び続けたことでしょう。このことは、主イエスが私たちに近づいてくださるとき、私たちもまた、イエスに近づかなくてはならないことを教えています。イエスは私たちを救おうと、私たちに近づいてくださいます。そうなら、私たちは知らないうちに救われていくのでしょうか。そうではありません。私たちもまた、イエスに近づき、イエスに救ってくださいと願い、祈り、求めて、イエスの救いが私たちに届くのです。私たちが救おうと近づいてくださるイエスに、私たちの側からも応答すること、それが信仰です。

なにもかにも恵まれていますと、人は神への信頼を忘れます。「神さま」、「イエスさま」と、助けを願わなくても十分に幸せで、神も救い主も必要でないと思ってしまうからです。また、こんな方もいるかもしれません。あまりにも惨めな状態が長く続くと、絶望しきってしまって、神がそこから救ってくださることも信じられなくなり、イエスに助けを願う心さえ失ってしまうこともあります。しかし、自分にはいやされなければならないもの、神に赦してもらわなければならないものがあると気付いて、それをイエスに求めるとき、イエスはそれに答えてくださいます。絶望の淵からの叫びであっても、そこから「救い出してください」と願うとき、イエスの救いが私たちに届きます。

次にこの10人の人たちは、イエスが「行きなさい。そして自分を祭司に見せなさい。」と言われたとき、その言葉を信じて、そのとおりにしました。10人が祭司のところに向かっていくうちに、病気に冒されたからだか、みるみる、治っていきました。さきほど信仰のステップの第一は、主イエスに叫び求めることと言いましたがその第二は主イエスの言われたようにやってみること、つまり神の言葉を信じてそれを実行することです。15節に「そのうちのひとり、自分のいやされたことがわかると」とありますが、「いやされたことがわかる」というところは直訳すると「いやされたのを見て」となります。信仰は、まだ見ていないことを、それが実現すると信じることですが、そう信じる者は必ず結果を「見る」ことができるようになります。多くの信仰者たちはそのことを体験してきました。皆さんも、聖書の言葉を信じて、それが実現したのを数多く見られてきたことと思います。神は私たちに見ないで信じることを求められますが、信じる者には、神の言葉の力を見せてくださるのです。

信仰のステップの第三は、神とのまじわりの中にとどまることです。10人のうちひとは、自分がいやされたことを見て、「大声で神をほめたたえながら引き返して来て、イエスの足もとにひれ伏して感謝」(15、16節)しました。けれども他の9人は、そのまま自分たちの町や村に帰っていきました。しかも、神をあがめ、イエスに感謝するためにやってきたのは、サマリヤ人でした。それでイエスは「十人きよめられたのではないか。九人はどこにいるのか。神をあがめるために戻って来た者は、この外国人のほかには、だれもいないのか。」(17、18節)と言われました。これは、「わたしが治してやったのに、わたしに感謝しないのはけしからん」という意味の言葉ではありません。イエスのご自分が感謝されたいために、そう仰ったわけではありません。当時のユダヤの人々は、奇跡やいやしなどといった目に見えるものにとらわれていました。ここでも10人ともツアラーが癒されたわけですから信じられないぐらいうれしかったはずですが。心の中で「神様は私のことを憐れんで癒して下さった。何て私は幸せ者か！」と叫び、大喜びだったことでしょう。しかしいやしや奇跡をもてはやすのですが、奇跡を行うことができる全能の神に信頼することをせず、いやしを喜んで、いやし主であるイエスを忘れてしまうのです。ひどい場合には

喜びながら私は恵まれる何かを持っているのかなとまで思い始めるのです。

信仰とは、人格と人格のまじわりです。神からその力を引き出すだけ、イエスからいやしを受け取るだけのものではありません。自分を救ってくださったお方、いやしてくださったお方と共に生きることです。その第一歩が「神への感謝」「主イエスへの感謝」です。神の救い、イエスのいやしを受けたなら、それを神に、イエスに感謝する。そうすることによって、神とのまじわりが生まれ、イエスと共に生きる生活が始まるのです。私たちも、誰かから何かをいただいたり、していただいたら、「ありがとうございました」とお礼を言います。そうすることによって、その人との関係が生まれ、育っていきます。それは、神と人との間でも同じです。神に助けを求めるとき、神はそれを与えてくださいます。そして私たちがそれに感謝するとき、神との豊かなまじわりが、救い主と共に生きる喜びが私たちに与えられるのです。聖書が教える「感謝」は、なんとなく、しあわせな気分ひたるといったものでもありません。それは、神のみこころを喜ばせ、キリストに従う道です。私たちが感謝の心を持つのはそれによって自分を喜ばせるためではなく、それによって神を喜ばせるためです。ほんとうの感謝は神に向かって献げられるものです。聖書は「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい」テサロニケ第一 5:16~18 と言ったあと、「これが、キリスト・イエスにあつて神があなたがたに望んでおられることです」(18 節)と書き加えています。「これが、キリスト・イエスにあつて神があなたがたに望んでおられることです」というのは、直訳すれば、「これが、キリスト・イエスにある、あなたがたへの神のみこころです」となります。「これは神のみこころである」というのは、とても強いことばで、ここに宣べられていることは、決してないがしろにしてはならない大切なことであることを表わしています。使徒パウロは、どの手紙においても「私はイエス・キリスによって私の神に感謝します」「神に感謝します」「私は、私を強くしてくださる私たちの主キリスト・イエスに感謝をささげています」「私は、祈りのうちにあなたのことを覚え、いつも私の神に感謝しています」と誰に感謝しているのかをはっきりさせています。誰かの世話になったとしてもその人への感謝と共に、もとはやっぱり神様から来ていることを明確にします。神との交わりはそうやって深められてゆきます。

また私は、問題を抱えていらっしゃる方に「苦難の日にはわたしを呼び求めよ。わたしはあなたを助け出そう。あなたはわたしをあがめよう。」詩篇 50:15 という言葉をよく贈ります。すると、「それって『苦しいときの神のみ』ではないですか。それならご利益宗教と変わらないじゃないですか」と言われることがあります。しかし、私は「聖書にそう書かれているのだから遠慮しないで神様の助けを求めれば良いと思います。それこそ、叫ぶようにして求められたら良いと思います。ただし後半の『あなたはわたしをあがめよう』という部分は忘れないようにしてください」と言います。これは日曜日共に礼拝するというこの意味にもつながります。この礼拝はこれから始まる週の歩みが守られ祝福されますことを覚えて捧げているならそれは半分の意味です。過ぎた一週間の中に主がなしてくださったみわざ、恵みをもって礼拝に臨み、神への感謝を表すこと、また犯してしまった罪を持ってきて神の赦しを求めること、これが礼拝を捧げることの別の大切な面です。だからこそ、どのような思いをもって礼拝に臨むかということがいつも問われるのです。礼拝に来る前からどのような礼拝になるかがある程度決まっているとも言えます。感謝を捧げるべきお方をはっきり意識して礼拝を捧げてゆく時に私たちは、神と共に生きる喜びに生きる者になれる。願って受け、受けて感謝をお返ししていく、そんな信仰の喜びを体験してゆく群れでありたいと願わされます。あなたは何をもって神に感謝を表していますか？ 賛美でしょうか？ 祈りのことばでしょうか？ 喜んで捧げる奉仕でしょうか？ 祈ります。